

[コンペティション]
PFFアワード2021

自主映画のためのコンペティション「PFFアワード」。
 本年は、489本の応募作品の中から入選した18作品をスクリーンでご紹介します。
 上映後には、監督が客席の皆さんからの質問に答えます。ぜひご参加ください。

PFF Award 2021

PFFアワード2021入選監督たち



セレクション・メンバー ※敬称略。五十音順

最終審査員 ※敬称略。五十音順

PFF Award Competition 2021 Juries

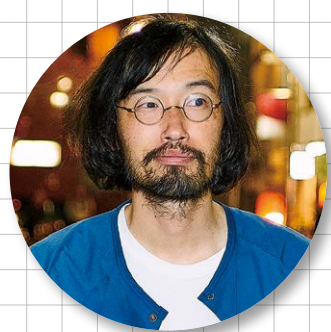
PFFアワード2021入選作品は、
この16名でセレクションしました。

- 雨無麻友子 映画プロデューサー
- 荒木啓子 PFFディレクター
- 五十嵐耕平 映画監督
- 稲垣美音 デザイナー
- 大久保 渉 ライター/編集者/パブリシスト
- 加藤綾佳 映画監督
- 上條葉月 映画館スタッフ/字幕翻訳者
- 木村奈緒 フリーライター
- 久保田ゆり PFFスタッフ
- 佐藤友則 映画資料関連事業スタッフ
- 田中大地 映画館支配人
- 長井 龍 映画プロデューサー
- 永井勇成 DOKUSO映画館 マガジン編集長
- 中野弘基 作曲家
- 新谷和輝 ラテンアメリカ映画研究者
- 森川和歌子 映画人材育成事業スタッフ



池松壮亮
IKEMATSU Sosuke
俳優

1990年生まれ、福岡県出身。2003年、『ラストサムライ』で映画デビュー。14年に出演した『紙の月』、『愛の渦』、『ぼくたちの家族』、『海を感じる時』で、日本アカデミー賞新人俳優賞に輝く。20年には『宮本から君へ』でキネマ旬報ベスト・テン主演男優賞ほか多数受賞。主な出演作に『映画 夜空はいつでも最高密度の青色だ』(17年)、『君が君で君だ』、『斬』(18年)、『アジアの天使』(21年)など。近年、中国映画『柳川』、『1921』にも出演。



今泉力哉
IMAIZUMI Rikiya
映画監督

1981年生まれ、福島県出身。2010年、『たまの映画』で長編デビュー。主な作品に『こっぴどい猫』(13年)、『サッドティ』(14年)、『退屈な日々』(17年)、『愛がなんだ』、『アイネクライネナハトムジーク』(19年)、『mellow』、『his』(20年)など。2021年もすでに『あの頃』と『街の上で』が公開され、さらに『かそけきサンカヨウ』が10月15日より公開予定。最新作は『猫は逃げた』(22年公開)。



柴崎友香
SHIBASAKI Tomoka
作家

1973年生まれ、大阪府出身。2000年、『さようのできごと』(04年映画化・行定勲監督)でデビュー。07年、『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞大賞、咲くやこの花賞、10年に『寝ても覚めても』(18年映画化・濱口竜介監督)で野間文芸新人賞、14年『春の庭』で芥川賞を受賞。他の著書に『千の扉』、『待ち遠しい』、『百年と一日』、『岸政彦との共著「大阪」』など。



岨手由貴子
SODE Yukiko
映画監督

1983年生まれ、長野県出身。ENBUゼミナールで製作した短編『コスプレイヤー』がPFFアワード2005に入選。初の長編『マイムマイム』がPFFアワード2008で準グランプリを受賞。09年、ndjcに選出され、『アンダーウェア・アフエア』を製作。15年『グッド・ストライプス』で長編商業映画デビューし、同作で第7回TAMA映画賞最優秀新進監督賞、2015年新藤兼人賞金賞を受賞。最新作は『あのこは貴族』(21年)。



高田 亮
TAKADA Ryo
脚本家

1971年生まれ、東京都出身。2011年、『婚前特急』で劇場映画脚本家デビュー。14年、『そのみにて光輝く』でキネマ旬報ベスト・テン脚本賞、ヨコハマ映画祭脚本賞を受賞。近年の主な脚本作品に『武曲 MUKOKU』(17年)、『映画クレヨンしんちゃん 激突!ラクガキングダムとほぼ四人の勇者』(20年)、『まともじゃないのは君も一緒』(21年)など。『ボクたちはみんな大人になれなかった』が11月5日より公開予定。

PFF Award 2021

PFFアワード2021 各賞

【最終審査員の選ぶ3賞5作品】

- ▶ **グランプリ** (副賞100万円)
映画監督として最も期待したいつくり手に贈られます。
- ▶ **準グランプリ** (副賞20万円)
グランプリに迫る才能を感じさせるつくり手に贈られます。
- ▶ **審査員特別賞** (3作品) (副賞10万円)
無視することができない才能を感じさせるつくり手に贈られます。

【PFFオフィシャルパートナーの選ぶ賞】

- ▶ **エンタテインメント賞** (ホリプロ賞)
作品の優れたエンタテインメント性に対して贈られます。
- ▶ **映画ファン賞** (ぴあニスト賞)
一般審査員による賞。「映画館で見たい」才能に対して贈られます。

【観客の選ぶ賞】

- ▶ **観客賞**
観客の人気投票により、最も高い支持を得た作品に贈られます。

*各賞受賞者にはPFFスカラシップへの挑戦権が贈られます。

あなたも審査員に! 観客賞に投票しよう。

ご来場のお客様、およびDOKUSO映画館で
ご覧になった方の投票により、
観客賞を決定します。ぜひご投票ください!

映画祭最終日、受賞作品上映あり!

🕒 **9.25** ± **12:00** ~ 準グランプリ受賞作品上映
9.25 ± **16:00** ~ グランプリ受賞作品上映

*上映作品は**9.24**📅に公式サイトで発表します。

ココが
すごい!

16名のセレクション・メンバーが、入選作品に選んだ[ココがすごい!]をご紹介します。/ 作品紹介文: 上條葉月

国内最大級のインディーズ
映画配信サイト
<https://dokuso.co.jp/>

DOKUSO
映画館

「観客賞」にネット投票できる!

もっと観たいけど、
なかなか
時間が合わない方へ!

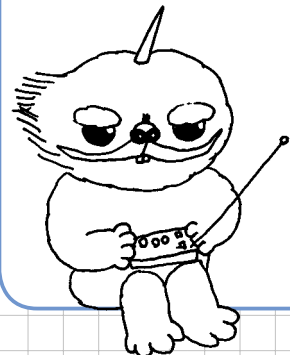
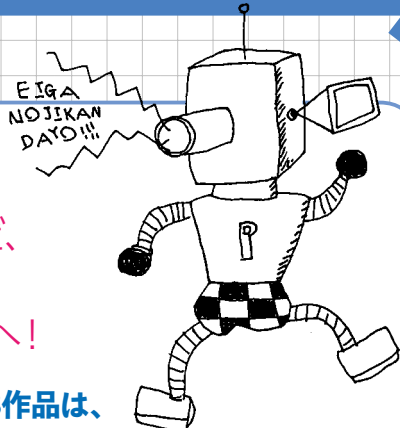
PFFアワード2021入選の18作品は、
DOKUSO映画館と**U-NEXT**で
オンライン配信を行います。

【配信期間: **9.11** ± **12:00** ~ **10.31** 📅 **23:59**】

210,000本以上が見放題!
<https://video.unext.jp/>

U-NEXT

「U-NEXTポイント」で視聴できる!



ココが
すごい!

人生におけるエポック・メイキングの瞬間——そのひとつに、友人や恋人たちと過ごす時間が増えて、親から教わってきたルールが絶対的なものではなくなくなってしまう、あの季節があると思います。世界の見方が目まぐるしく変わり、ひらけていく反面、知りたくないことまで知ってしまう、成長への代償。そんなひと夏の経験を、魅惑的なリズムで追体験させてくれる、ちょっぴり辛辣でとびきりキュートな(愛)の物語!
大胆かつ堂々とした大野監督の演出は、映画づくりの喜びにあふれていて痛快なのです。出会ったが最後、トリコになること間違いなし!!

長井 龍 映画プロデューサー

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

家族とは何か、愛とは何かを考える機会がありました。そして、少女の成長ストーリーを絡めながら、現代の家族の形態について描きたいと思いこの企画が動き出しました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

2019年より構想し、2年間の製作期間を経て完成。使用カメラはSONY α7Ⅲ。主に学生メンバーで撮影を行いました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか?

「まずやってみること!」を大切にしています。また、今回の撮影を通して、「人と人との繋がり」の大切さも強く実感しました。

『愛ちゃん物語♡』

2021年/カラー/91分
監督・プロデューサー・脚本・編集: 大野キャンディス真奈
助監督: ryo matsumura、竹井啓吾
出演: 坂ノ上 茜、黒住尚生、保土田 寛、松村 亮

人との出会いで世界が変わる。キュートな現代の成長譚

早くに母を失い、厳しい父のもとで高校生になるまで友情も知らずに生きてきた愛。トランス女性の聖子さんとの出会いで、彼女の世界は一変する…。カラフルでポップな世界観で、成長物語の王道を独創的に塗り替える!

🕒 **9.11** ± **11:30** ~
9.15 📅 **16:30** ~ 小ホール

program



監督: **大野キャンディス真奈**

おおのきゃんでいすまな◎1998年生まれ、千葉県出身。『歴史から消えた小野小町』(17年)が、カナザワ映画祭で期待の新人俳優賞、東京学生映画祭で観客賞を受賞して話題に。SHINPAの「在宅映画製作」プロジェクト(20年)にも参加。



『**苺のジャムとマーガリン**』

2021年/カラー/10分
監督・脚本・撮影・編集：宮永咲弥花
出演：清水陽香、竹本朝信、三代朋也、宮永咲弥花

コッペパンさえ特別。10代の豊かな感受性が溢れだす!

好きな人の味は、苺のジャムとマーガリン。日々喜びや苦悩を感じる多感な時期に、高校生たちはいかに自らを表現するのだろうか? 写真、絵、小説、演劇。様々な手法で現在の感情や感覚と向き合う少年少女を描く。

🕒 9.15🌀 13:30~小ホール
9.18🌀 15:00~

program

D



ココが
すごい!

箸が転んでもおかしい年頃の、そのおかしさをもはや共有できない大人にも伝えるのは難しい。けれどこの作品は、高校生たちがごく日常の中にエモーショナルな瞬間を見出すように、ごく平凡な高校生活の風景を見事に映画的な瞬間へと昇華している。コッペパンを食べる少年の背中さえ魅力的に捉えたズームアウト! そして日々の感情を元に自らの表現へ向き合う高校生たちの姿は、本作を撮った監督自身にも重なる。苺のジャムとマーガリンから物語を紡ぎ出す感受性の瑞々しさと、特別で平凡な思春期を俯瞰する眼差しを持つ監督の早熟さが眩い。

上條葉月 映画館スタッフ/字幕翻訳者

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

高校生活最後に、集大成となる映像作品をつくらうと思いました。日々何気なく通り過ぎるけれど、決してもう二度と繰り返すことのない一瞬をかき集めて、映像として再構築できないかと試みました。3年間、感情の言語化に足掻いてきた自分自身の味方になるような作品ができればと、向き合ってた制作した映像です。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

制作期間は2020年9月~12月の約3ヶ月。撮影体制は授業の課題規定に従って、スタッフ・キャストはあらかじめ決められた4名。用意された撮影機材を使用。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか?

当時最も大切にしていたことは「キャストの魅力を見定めてからシナリオを起こすこと」と、「自分自身の形容し難い感覚を言語化してみること」です。その気持ちをずっと持ち続けていたことで、人に観てもらった作品をつくることの意味と、曖昧な自分の内面を覗いて追及すること、両方を意識した映像づくりになったと感じます。

監督：宮永咲弥花

みやなが・さやか◎2002年生まれ、埼玉県出身。好きな映画やアニメに携わることに憧れ、埼玉県立芸術総合高等学校に入学、映像制作を始める。現在は、通信大学で油絵を学びながら、自分の表現と発信について模索中。

『**壁当て**』

2021年/カラー/10分
監督・脚本・撮影・編集：井上朝陽
出演：山本惣太、太田和樹

“壁当て”を通じて描かれる、野球少年の友情と葛藤

一人で壁に向かって野球の練習に励む少年。そこに現れた、もう一人の野球部員。チームメイトであり、ライバルでもある2人の野球少年の微妙な関係を、壁にボールを当てる淡々としたリズムの中で言葉少なに描き出す。

🕒 9.14🌀 14:30~小ホール
9.19🌀 14:30~

program

C



ココが
すごい!

壁当てというひとりきりのキャッチボールを象徴的に描くのではなく、あくまでそのアクションと反復される乾いたリズムに身を委ねることで、多くを語らずともドラマが立ち上がっていく。そのうち、捕球の仕方が少しだけ変わっているのに気づく。焦燥感、羨望、嫉妬、そういった感情が垣間見える。熱い友情とか勝利への意志とかではなく、その手前にあるもっと個人的な、口に出せないような思い。夜の高架下を白球が跳ねる。あとで振り返ったときにけっして美化はされないが、それでも忘れることのできない情景がこの映画にはある。

新谷和輝 ラテンアメリカ映画研究者

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

1人1つ10分間の作品を制作するという授業の課題で制作しました。担当講師の方と相談したり、『ピンパン』という短編映画を鑑賞したりする中で、自分もセリフはなくともリズムやテンポ、そして登場人物と同じ時間を共有できるような作品をつくりたいと思い、制作しました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

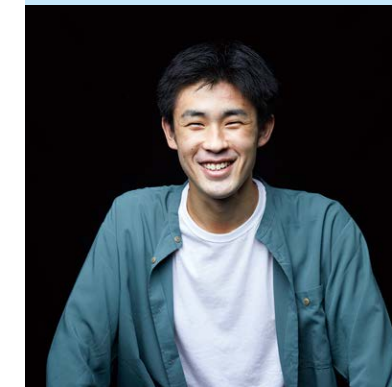
制作期間は企画から編集完了まで2ヶ月程度かかりました。撮影はSONY HDR-CX680というハンディカムを用いて、スタッフは私1人で制作しました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか?

私自身、まだまだ映画をつくり始めたばかりです。そのため、何を一番大切にしているのか、自分にとって何が絶対に譲れないものなのか、まだまだ分からないのが正直なところ。今は自分の軸になるようなものを模索している段階です。映像制作に携わっていく中で、少しずつ見つけていけたらいいと思っています。

監督：井上朝陽

いのうえ あさひ◎2001年生まれ、大阪府出身。映画好きの父の影響で幼い頃からたくさんの映画に触れ、映像制作を志す。現在は、ビジュアルアーツ専門学校 大阪に在学中で、本作は同校での課題として制作された。



『巨人の惑星』

2021年/カラー/25分
監督・脚本・撮影・編集：石川泰地
音響：佐藤恵太/VFX：癸生川稜
出演：石川泰地、国本太周、高取生

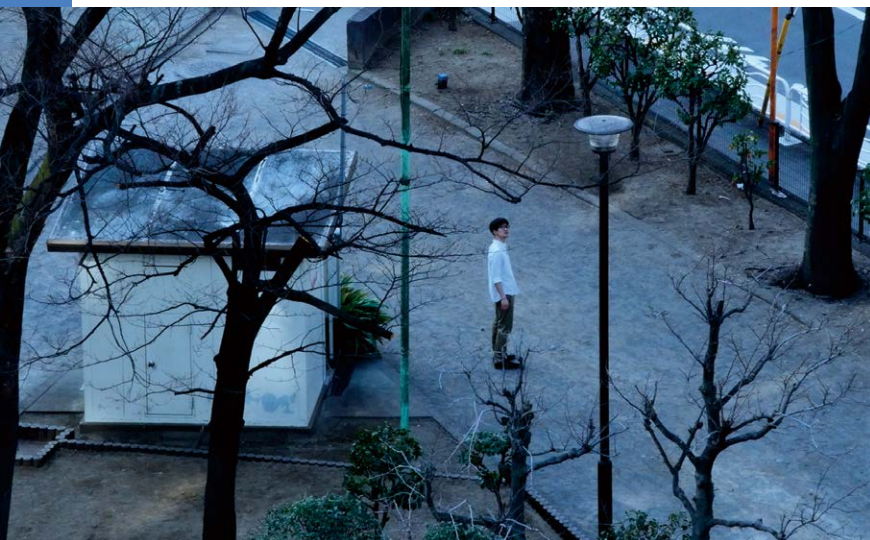
『巨人がいる』という男の強烈な世界観を信じるか？

大学時代の友人の家を訪ねると、彼は「夜の東京には巨人がいる」と熱弁します…。見えない「巨人」の存在を信じて一人の世界に引きこもるホダの姿は、現代社会の様々な陰謀論を想起させる。巨人は彼の妄想なのか？

🕒 9.14🕒 11:30～小ホール
9.18🕒 18:00～

program

B



ココがすごい!

二人の男のオフビートな会話がなんとも可らしい。久しぶりに訪ねた友人は、大学にも行かず、引きこもっている様子。「この男に比べたら、失職している俺の方がまだましだ」と、男は思ったに違いない。しかし友人は、自分だけが「人類の危機的状況」に気づき、いま人生最高の生き甲斐を見出していると確信していると言いつつ、やがて、二人の間の優位性が逆転していく様が、ユーモアとサスペンスを織り交ぜて展開していく。古い日本映画のような「溜め」のあるセリフ回しや、クローズアップで映し出される目の演技など、巧みな演出も出色。

久保田ゆり PFFスタッフ

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

昨年一番初めの緊急事態宣言中、2ヶ月間ほぼ家から出ず、昼夜逆転した生活を送っていました。目の冴え渡ったある深夜の3時頃、ふと「隣の家の屋根の上から、真っ黒な空に溶け込むように巨大な人の顔が覗いていたら、そしてそれに自分だけが気づいてしまったら、恐ろしいに違いない…」と妄想したことが始まりです。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

昨年11月に脚本を書き始め、今年2月に撮影しました。メインの撮影は2日間で現場は石川、国本、佐藤の3人。使用したカメラはLUMIX DMC-GH4です。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

準備です。脚本を含め、撮影に入るまでに考える全てのことについてあらゆる視点から検討し尽くすように、できるだけ努めているつもりです。いざ実際に撮影が始まったら、目の前で起きていることに瞬発力を持って敏感に反応することに集中します。そのためにも入念な準備が欠かせません。

監督：石川泰地

いしかわ・たいち◎1995年生まれ、東京都出身。高校3年生で映画制作をはじめ、早稲田大学入学後、サークルで多数の学生映画に関わる。卒業後は自主制作を続けながら、テアトル新宿と山形国際ドキュメンタリー映画祭でアルバイトしている。



『帰路』

2021年/白黒/19分
監督・脚本・編集：高橋伊吹
カメラ：高羽快登
出演：高橋伊吹

高校生の感じる、何も起こらない日常の中の切実さ

10時42分、少年は高校を抜け出す。まっすぐ家に帰りたくない気がしても、やっぱり最後は帰るしかない。少年が家への帰路の中で巡らせる思いや切実な感情が、彼の見ている景色のような親密な映像で表現される。

🕒 9.14🕒 17:45～小ホール
9.19🕒 11:30～

program

G



ココがすごい!

決して劇的な出来事を描いているわけではない。むしろ描かれているのは誰もが一度は経験したかもしれない冴えない時間。にも関わらず、いや、だからこそそれに向き合い、1本の映画として成立させたことが素晴らしい。音を意識した編集リズムや孤独感を感じるアングル。モノクロの映像が訴えかけてくるのは、青くなんてない青春。それらが効果的に作用し、並々ならぬ切実さとなって見る者の心を刺しにくる。そして、おそらくその大半は感覚的に行われているような気がするのだ。つくろい手は間違いなく今後を期待したくなるセンスの持ち主だ。

加藤綾佳 映画監督

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

高校最後に、今感じている事を映像として残したいなと思って制作しました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

撮影は従兄弟にスマホのカメラで撮ってもらい、ほぼ一日で行いました。追加で一人で撮影しに行きもしました。編集はVEGAS PROで行いました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

あまり映画を見ない人も映画好きの人も、楽しんで見てくれるような演出をしようとは心掛けています。

監督：高橋伊吹

たかはし・いぶき◎2002年生まれ、愛知県出身。ラジオでライムスター宇多丸の映画批評を聴き「この人に自分の映画を批評してもらいたい」と映画制作を志す。瑞陵高校の映画部で映画制作を行い、現在は立命館大学映像学部在学中。



『グッバイ!』

2021年/カラー/31分
監督・撮影・編集：中塚風花
監修：植松真人/機材協力：岡本実樹
出演：中塚風花

今の私しか撮れない、手探りのセルフドキュメンタリー

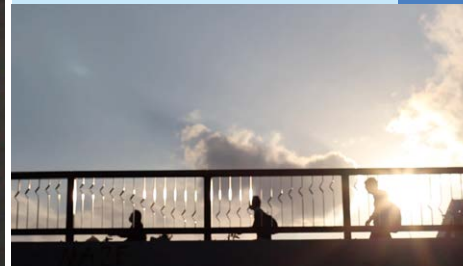
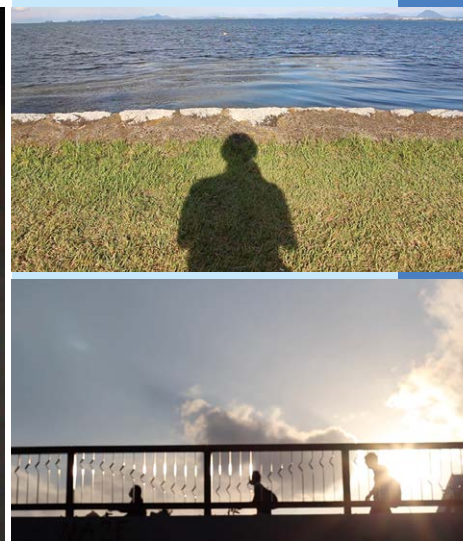
一緒に暮らす母親、離れて暮らす父や姉との関係。就職や上京といっためまぐるしい変化の時期に、自らカメラを持って今見ている世界と向き合ってゆく。グッバイの先の未来へ向かってゆく彼女を応援したくなる!



🕒 9.12 @ 17:45~
9.16 @ 13:00~ 小ホール

program

A



ココがすごい!

あの母この父! どうする私? 愛憎交じる私的な記録。中塚監督のアンビバレントな感情は作家固有の表現力と繋がり胸打つ文体が生まれている。冷たいけれど温かく、繊細だけれど大胆で、まじめだけれどゆとりのある映像の数々。その揺らぎや混ぜこぜさがあるからこそ、いいのだと思う。人の心の複雑な機微を絶妙な進捗と深度で語っていく。そして、自分とは? 家族とは? 人と人の繋がりは? 言葉にならない想いを映画の光で照らします。観ているこちらの心の、記憶の奥底をも、くすぐります。稀有な感性を作品に宿すその歩みに注目したい。

大久保 渉 ライター/編集者/パブリシスト

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

卒業制作として制作した作品です。20歳になる少し前に完成した作品で、少しでもちゃんと大人になるために撮った作品です。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

制作期間：約7ヶ月。使用カメラ：Canon EOS kiss X7i。撮影体制は主に1人で街ロケでの風景、家族、人を撮る。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか?

調子に乗らないことと期待すること。これは譲れないものというより教わったことになると思いますが、映像学校の恩師に沢山のことを教えていただきました。



監督：中塚風花

なかつか・ふうか◎2000年生まれ、滋賀県出身。ビジュアルアーツ専門学校 大阪に入学し、撮る側になったことで、改めて映画の魅力に気付く。同校の卒業制作として本作を制作。現在はテレビ番組のADとして、忙しい毎日を送っている。

『県民投票』

2021年/カラー/92分
監督・製作・撮影・編集：大場丈夫
出演：鶴沢恵一、姜 咲知子、徳田太郎

ひとりひとりが政治について考える重要さを問いかける

原発再稼働の是非を問う県民投票をめぐるドキュメンタリー。自分自身で政治について考える大切さをよびかけ、対話を重ねる人々を映した本作は、私たちが目を背けてはいけない現代日本の政治の姿をしかと捉えている。



program

F

🕒 9.12 @ 11:30~
9.16 @ 16:15~ 小ホール

ココがすごい!

「うわあ…茨城県が狂ってる。絶対に住まないぞ」なんて甘いことでは済まされない。他県の他人事だと笑えなくなる。日本全国で同じことが起きる、起きていると考えると怒りがこみ上げてくる。果たして自分は作中の登場人物のように強く生きられるだろうか。悪代官を超越した政治家たちと戦えるだろうか。「どうせもうすぐ老害は消えるでしょ」とバカにしている場合じゃない。勇気を絶望を感じさせられ、それでも希望を持ち、変える、変えていかなくてはならないと思知らされる1本。

永井勇成 DOKUSO映画館 マガジン編集長

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

賛否が分かれ答えの出ない社会問題について、まず対話の場をつくり、納得いく答えを出すという活動があることを知ったのがきっかけです。なぜ社会に属しながら、どこか他人事にして安住してしまうのか、長い間考えていました。こうした活動が自分達だけでなく、次の世代にとっても大切になるのではと考えました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

撮影：11ヶ月(2019年9月~2020年7月)。編集：7ヶ月。撮影体制：1人。使用カメラ：SONY PXW-X70。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか?

ドキュメンタリー制作にあたっては、内容の干渉を最後までどこからも受けないことを前提とします。台本なしで観客者に徹して撮影し、ありのままを描くことに注力しました。観客による自由な解釈や感じ方を喚起するため、ナレーション・音楽・テロップは使用せず、映像と音声のみによって映画世界を構築しています。

監督：大場丈夫

おおば・たけお◎1982年生まれ、茨城県出身。タルコフスキーやプレッソンらの作品に憧れ、映画制作を志す。日本映画学校卒業後、地方のケーブルテレビ局に就職。日々の番組制作の傍ら、ドキュメンタリーを撮り始め、「祖母」(19年)を制作。

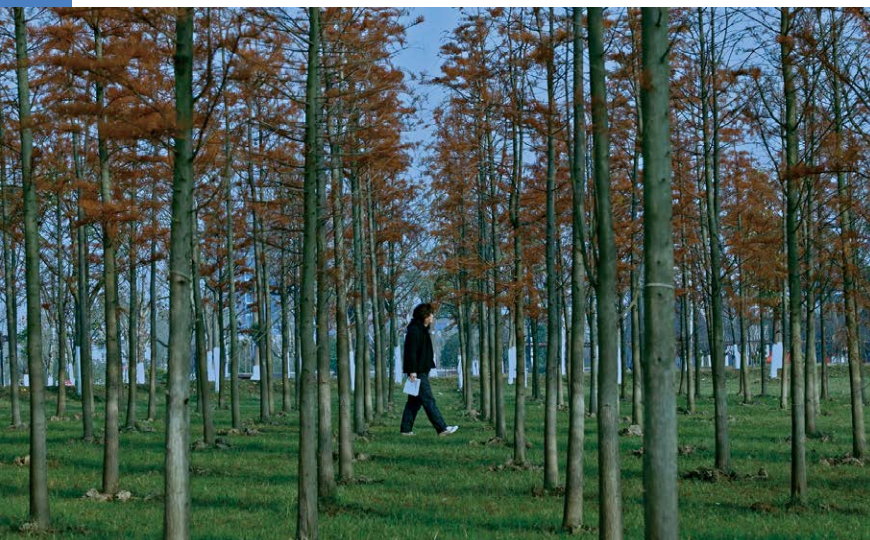


『五里霧中』

2021年/カラー/40分
 監督・脚本・編集：曾子明
 撮影：王军、王星野/プロデューサー：曾 缤、卢明慧
 出演：黄柯精、常嘉豪、蔡浩、李维新

廃墟の風景の中にリアルに浮かび上がる若者たちの葛藤

廃墟の並ぶ中国の町で、闇商売でしのぐ若者たち。主人公パンは恋人や後輩が新天地へ向かおうとする中、どうにかもがいていく…若者たちの人生への諦観や焦り、葛藤が、暗い町の風景と重なり、生々しく映し出される。



🕒 9.12 @ 17:45~
 9.16 @ 13:00~ 小ホール

program

A



ココがすごい!

オープニングのバイクで通り過ぎる寂れた街の風景。中国の地方都市、見慣れない廃墟の街は、置き去りにしてきた過去のようでもあり、私たちの街にやがて訪れる未来のようにも思えて苦しかった。本作の真の主役と言えるほど印象的な街の風景は、そこで現実暮らし多数の同様の若者たちの存在を想起させる。国や文化が違ってなおお生々しく刺さってくる、社会や時代に置き去りにされた若者たちのやるせなさ。今そこでしか撮れなかったであろう風景の特別さと、疎外された若者たちの“どこにもいけない”袋小路という普遍性を同時に映し出す。

上條葉月 映画館スタッフ/字幕翻訳者

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

この映画は自分の数年前の見聞や成長経験から制作しました。今の中国の小さな県城の若者の迷いを表現する必要があると感じました。そしてもう一つは、立ち遅れていた小さな県城でもどんどん前に進んでいるのに、新しい世代の若者としては立ち止まっている対比が面白いと思います。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

使用カメラ：Blackmagic Pocket Cinema Camera。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

自分の中に、この映画をつくる前に絶対に撮っておかなければならないイメージがあったんだと思います。その考えが映画の基調をつくる。だから、どんなに邪魔をされても、自分の思うような雰囲気を出すことが大事だと思います。

監督：曾子明

そ・しめい●1995年生まれ、中国湖北省出身。黒澤明監督の『羅生門』を見て以来、映画に興味を持つようになり、日本映画に興味をもつ。本作は、武蔵野美術大学の卒業制作として制作された。現在は中国の映画会社で働いている。



『サイクルレース』

2021年/カラー/5分
 監督・アニメーション・編集：倉澤紘己
 音響：大森寿一

独特な世界なのに、なぜか懐かしいような不思議な魅力

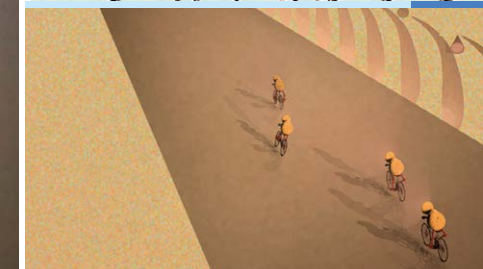
自転車のレースの途中、気づけば道を外れて1人走り続け…。延々と続く道、自転車のリズム、見守る電灯。独創的なアニメーション世界でありつつ、観客に自分の記憶を連想させるような余白ある空間に魅了される。



🕒 9.11 @ 11:30~
 9.15 @ 16:30~ 小ホール

program

E



ココがすごい!

誰がスタートの合図を出したのか。自転車は振り返らずにひたすら走り、街灯は上空からそれを見つめる。個々のライトが光を放つその空間で、自転車と街灯の音が淡々と繰り返され、響き合う。双方の音が互いに少しずつ変化をつけたり、どちらか一方が消え入ったりするうちに、世界の在り方が変わって行く。どこからか亡霊の音がする。映し出されるものから人間の臭いを排除し、徹底して装飾が抑制された世界。動き、形、音、光といった基本要素のみのシンプルな表現で、深遠な場所に物語が行き着いていることに感動する。

中野弘基 作曲家

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

学校で「MAYAで3DCG入門!」というような授業があり、その授業を受けるなかで3DCGで新しい表現が開拓できるのではと思ったから。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

MAYAでアニメーションを製作し、AfterEffectsで質感、色を加えて製作しました。ほとんど家で一人PCと向き合って6ヶ月ぐらいかけて製作しました。3分の2ぐらいできた時に大森くんと知り合って音響をお願いしました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

面がもたらすエモーション。ビジュアルの雰囲気。

監督：倉澤紘己

くらさわ・ひろき●1999年生まれ、神奈川県出身。高校2年生の時に、美術予備校で制作したアニメーションが好評で、アニメーション制作を志すようになる。現在在学中の武蔵野美術大学では、ドキュメンタリーの制作も行った。



『Journey to the 母性の目覚め』

2021年/カラー/5分
 監督・脚本・編集・アニメーション：岡田詩歌
 音楽：黒柳紗蘭/音響：井関幸平
 出演：川口真実、岡田和音、増田チカ、住吉美玲、岡田みずき

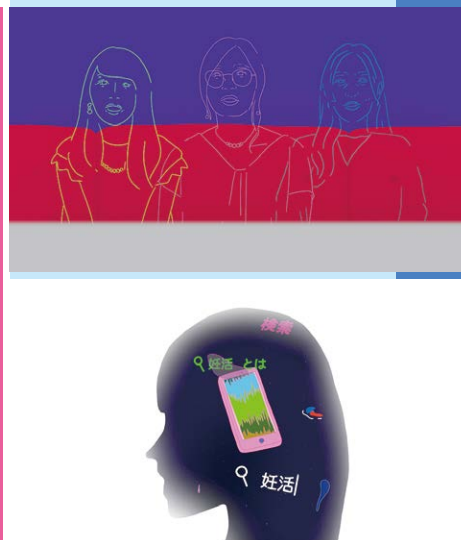
ポップな映像に凝縮された、母性をめぐる思考の旅

中学校への登校中、突然“母性”に目覚めた私。結婚や妊娠、子育て、様々な年代において私につきまとう母性をめぐる言説。母性、そして親になることとは？ 5分間のポップなアニメーションで様々な思考が駆け巡る。

🕒 9.12📍 11:30~
 9.16📍 16:15~ 小ホール

program

F

ココが
すてい!

少女は大人になり、母親になる。それって、何かが突然変わるの？ 母性ってなに？ この作品に出逢わなければ、そんな疑問にぶつからなかったかもしれない。本作で描かれるのは少女の母性の目覚めへのひと時。ユーモラスなシーンの応酬に圧倒される。

オリジナリティ溢れるグラフィック・転換描写・色彩感覚で、気が付けば世界観に巻き込まれていた。主人公の「子どもがほしい」という純粋な欲求から様々な視点へと移り変わり、母性への疑問と多様性を描き出していく。ただ、面白かったねだけでは終わらない、あとあじの残る素晴らしい作品だ。

雨無麻友子 映画プロデューサー

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

私は中学登校中に突然、母性に目覚めた。それから子供が欲しいという衝動が10年間私の根底にある。しかし大人になるにつれ、結婚、妊活、出産など、子供を産むことへの解像度が上がり、10年前に抱いた感情は本当に母性だったのかと疑問を抱くようになった。自分の母性と母性そのものについて考えるために制作した。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

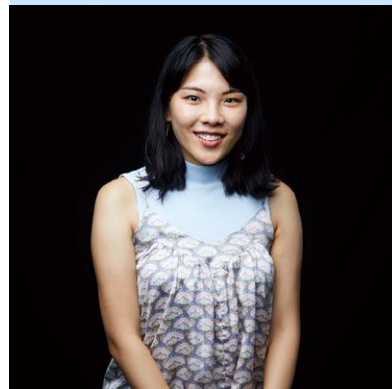
実制作期間は約1年間だが、構想は3年前前からあった。3年前前から妊活や出産についてのインタビューや調査を様々な友人知人に行い、自分の経験と組み合わせ作り上げた。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

自分の経験や記憶から着想して制作することが多いため、一人よがりになりすぎないこと、自分の中だけで完結しないことを意識している。本作品は、自分の印象的だった母性に関する記憶を元に制作しているが、他者の印象的な言葉や、インタビューシーンを入れることで、様々な角度から本作をご覧頂きたいと考えている。

監督：岡田詩歌

おかだ・しいか●1996年生まれ、東京都出身。兄の見様見真似で始めたアニメーション制作に魅了される。東京藝術大学大学院 映像研究科アニメーション専攻在学中に制作した「ワンダフル千鳥足 in ワンダーランド」(19年)が国内外の映画祭で上映。



『転回』

2021年/カラー/14分
 監督・脚本・編集：岩崎敢志
 撮影：寺西 涼/録音：三村一馬/照明：西野正浩/助監督：梅澤舞佳
 出演：加藤紗希、岩崎敢志、アライジン

印象的な映像で描き出す、芸術家たちの関係性の揺らぎ

志向の違う2人の若手芸術家カップルの元に境界では有名な芸術家の男が現れたことで、2人の感情や意識に変化が訪れる…。ショットの構図で微妙な人物たちの関係性をあぶり出す冒頭から、映像の魅力に引き込まれる。

🕒 9.15📍 13:30~ 小ホール
 9.18📍 15:00~

program

D

ココが
すてい!

最小の要素と身振りによって感情の揺れを描き出す岩崎監督の力量は瞳目に値する。ギャラリーと家の小空間で葛藤する映像作家同士のカップルの欲望と嫉妬を描く緻密な演出。業界で力を持つ男におもねる女のきびきびとした身ごなしと、それに反発する男の含みがちな佇まいが、鋭敏な撮影によって切り取られて目が離せない。

簡潔ゆえの緊張感と人の情けなさとの間に、『転回』という単純かつ大層なタイトルを重ね見るとき、観客はミニマリズムの先に広がるユーモアを見出すだろう。この二重の奥ゆかしさが本作の大いなる美徳である。

佐藤友則 映画資料関連事業スタッフ

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

映画美術学校の修了制作で何を撮ろうかなあと考えていた時期に、たまたまいった飲み会で行われてた会話を聞いていて、なんかいやなやりとりだな、けどこういうのって至る場面であるよなあと、帰りの電車でそのことを元にしてなんとなくのあらすじができたので脚本にしました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

撮影は2日で、スタッフ5人くらい、お金は確か5万円くらいで撮りました。カメラはPanasonicのGH5を使用しました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

あんまり考えたことないですが、素直な気持ちでつくることが大切なことなんだろうと思います。

監督：岩崎敢志

いわさき・かんし●1996年生まれ、愛知県出身。大学4年生の時に、映画づくりを志し、映画美術学校に入学。最近、録音部スタッフとして現場に参加しながら、自身の監督作の制作や、友人の作品づくりの手伝いをしていく。



『ばちらぬん』

2021年/カラー/61分

監督・脚本・撮影・編集・美術・与那国語指導：東盛あいか
撮影・VFX・カラーグレーディング：温 少杰/録音・整音：西垣聡美、村中紗輝/制作：木村優里
出演：東盛あいか、石田健太、笹木奈美、三井康大、山本 桜

与那国の持つ記憶や文化を、個人の経験に重ねた実験作

与那国に積み重ねられた歴史や文化と、今そこにはない監督自身の物語。大きな時間に個人の経験を重ねることで、そこにいた人々の人生も想像させる。フィクションやドキュメンタリーの枠を超えた、土地と人々の物語。

9.14(土) 14:30~小ホール
9.19(土) 14:30~

program

C

ココが
すごい!

これほどつくり手の意志を感じる映画にはなかなか出会えない。動植物、海、風、土地、島に生きる人々、彼らが語り継ぐ物語。それら全てが与那国島を形作っていることを私たちに語りかけてくる。

一方で、薄れゆく伝統が島の存在を変えてしまうことも危惧している。その現状に一石を投じるように宣言された『ばちらぬん』。語り継ぐ存在が居れば伝統は消えない。この力強い宣言は、私たちひとりひとりを形づくってきたあらゆる事物に想いを馳せる機会を与えてくれる。

そして、自分にも“忘れたくない”何かがあることに気づかされるはずだ。

田中大地 映画館支配人

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

映画制作のきっかけは、敬愛する祖父の老い、変化する島の様子、消滅危機言語の島言葉、それらから感じる寂しさや焦燥感でした。当初の企画書では、与那国でオールロケの劇映画を計画していました。コロナ禍で当初企画した映画を撮ることは困難になりましたが、ピンチを新たな挑戦として『ばちらぬん』をつくりました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

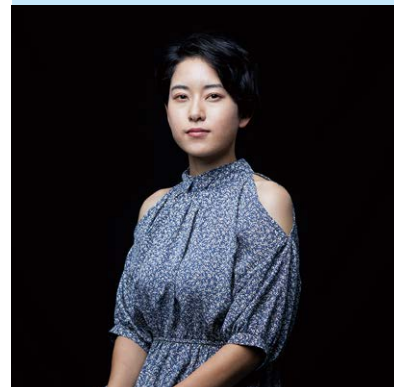
制作期間：1年。使用機材：Nikon D5300、iPhone SE、MUSON ACTION CAMERA MAX 1、DJI mini、Blackmagic URSA mini G1

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

感謝と約束を守る。

監督：東盛あいか

ひがしもり・あいか◎1997年生まれ、沖縄県出身。地元の与那国島には映画館もレンタルビデオ屋もなく、進学した石垣島の高校時代にレンタルDVDで映画を観始める。京都芸術大学で多方面から映画について学び、現在は俳優事務所に所属。



『Parallax』

2021年/カラー/34分

監督・アニメーション・音楽：野辺ハヤト
編集：野辺智子

見る側に解釈を委ねる、自由さ溢れるアニメーション

列になって並ぶ謎の生き物たち。ある者は選ばれ、ある者は選ばれない…不思議な映像や完成された世界観に思わず浸ってしまう。抽象的な映像と音楽で描かれるこの宇宙は、見る人によって様々な解釈をもたらすはず。

9.14(土) 11:30~小ホール
9.18(土) 18:00~

program

B

ココが
すごい!

根底では単純でない不変的なものを巡り廻らせ、柔らかな質感で豊かな余白を持って描かれたストーリーは、その時の自分の状況・感情によって何が残るのか変わってゆく。

どこを見るのか、どう考えるのか、何を感じるのか、余白の中の選択はこちらに委ねられていて、自分がどう感じ考えるのか知りたくなくて繰り返し観たくなる。

あまり動かない表情もそれは決して無感情ではなく、言葉にしようとする前に消えてしまう何かを感じさせてくれた。

稲垣美音 デザイナー

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

常に湧き上がる社会問題と情報の中では立場によってものの見え方は違います。『Parallax』は視差と言う意味ですが、理解し得ないそれを理解すると言うことの不確実性が世の中の歪みを生み出していると考え、まずは視差そのものという確実なものに向き合い、自分なりの表現として伝えたいと考えました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

制作期間は5年。下書きで動きの確認後、トレーシングペーパーに清書(微妙な掠れなどの質感が欲しいため)。スキャナーで一枚ずつデータ化し、調整・編集しています。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

映像と音楽の親和性、客観性、伝えたいことの軸がありつつも観る人が考える余白を持たせること。セリフや明確なストーリーがあるわけではなく、その分音楽が重要な役割をしており、映像の説得力を増すために音楽との親和性は常に意識して制作しています。

監督：野辺ハヤト

のべ はやと◎1971年生まれ、埼玉県出身。デザイン・イラストの仕事を行う傍ら、アニメーション制作を始め、アニメーションから作曲・演奏まで全てを手がける。[affordance](16年)が、海外映画祭で多数上映。



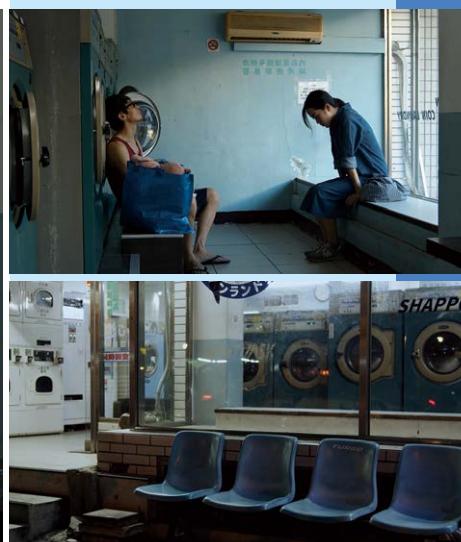
『豚とふたりのコインランドリー』

2021年/カラー/22分

監督・編集：蘇 鈺淳
撮影：林 詠翌/録音：辛 佩倫/サウンドデザイン：王 姿雅/音楽：三浦良明
出演：陳 又瑄、徐 華謙🕒 9.14🕒 11:30~ 小ホール
9.18🕒 18:00~B
program

些細だけれど大切な時間をワンカットで描いた野心作

台北のコインランドリーでプタのぬいぐるみを洗う男と、誰かを待つ女。大量生産のプタと同じく、人生で数多ある偶然の短い出会いだが、ふたりのことや街の暮らしが、ひたひたと積み込んで長い余韻を奏でていく。

ココが
すごい!

狭い路地を人々が行き交い、車やバイクの喧騒が響き渡っている。今はあの豚のぬいぐるみに代わる安物のおもちゃが店先に並んでいて、疲れた様子のサラリーマンは古びたコインランドリーには目もくれずに家路を急いでいる。これ、すべてはこちらの想像。

面識のない二人の男女がコインランドリーで鉢合わせる。

そこで交わされる会話から想像されるのは、ふたりの過去、そして未来。コインランドリーの中で起きる出来事が空間や時空をも超えて様々なことを思い起こさせる。一つの空間を越えることができるのは、まさに映画。

森川和歌子 映画人材育成事業スタッフ

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

去年恋人と別れて、台湾に帰った。芸大の監督領域受験のために、作品をつくらなきゃいけないから、台湾に知り合いのスタッフは日本より多いし、言葉の問題もないし、台湾で撮ることになった。コロナで自宅隔離のときに諏訪敦彦監督の本を読んで、即興に興味があった。自分も即興で撮ってみたいと思って、この作品をつくった。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

リハーサル1回、撮影1日、編集整音に2ヶ月くらいかかった。現場のスタッフは監督、撮影、録音、美術4人とキャスト2人。使用カメラはBlackmagic Pocket Cinema Camera 4K。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

芝居かな？ たぶん絶対に譲れないものはないと思う。100%自分の想像通りコントロールできないから、ここ最近ではスタッフのみんなに任せるようになった。だから私にとって一番大切なのはスタッフとのコミュニケーションと、キャストとのお互いの信頼。あとは現場の雰囲気、楽しく映画をつくりたいから。

監督：蘇 鈺淳

す・ゆちゅん◎1994年生まれ、台湾出身。台湾藝術大学の修了制作「ダウン・ザ・ロード」(18年)が、なら国際映画祭に入選。東京藝術大学映像研究科映画専攻の編集領域に在籍していたが、同監督領域への受験用に本作を制作し、本年度から編入。

『^{へだ}距ててて』

2021年/カラー/78分

監督・出演・編集・製作：加藤紗希
脚本・出演・製作：豊島晴香/撮影：河本洋介/録音・音響：三村一馬/照明：西野正浩
出演：釜口恵太、神田朱未、高羽快、本莊 滯、湯川紋子🕒 9.14🕒 17:45~ 小ホール
9.19🕒 11:30~G
program

行き交う人々、交差する時間。そして映画は家の外へ!

同じ家に住む女性アコとサンを中心として描かれる、家で暮らす者、訪れる者、出ていく者。家という舞台を効果的に用い、様々なアプローチの時間・空間表現に挑むムニバス。家で展開する人々の些細なズレの面白さ!

ココが
すごい!

二人の暮らす家によく知らない人が入ってきたり、人の家に行ってみたら理解し難い関係性のカップルが喧嘩してたりする。この世の中には圧倒的な他者がいて、くっついたり離れたりしているんだよねってことが、こんなに牧歌的に成し遂げられるとは思ってなかった。

それだけじゃなくて、すでにこの世にいない者、過ぎ去った時間も、ちゃんと他者としてこの世界に今もある事として描かれていて、それは僕たちをいろいろな距離の呪縛から解き放ってくれる。

今この時代にそう思わせてくれるこの映画に、なんだかすごくワクワクする。

五十嵐耕平 映画監督

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

前作の短編『泥濘む』を映画美学学校アクターズコースの同期と制作し、PFF2019で多くの方に観てもらえたことによりさらに映画に対する興味湧き、もっと長い作品も撮ってみたいと思いました。「前作と同じ出演者で異なる作品をつくること」「PFFでまた上映されること」を目標にしてみました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

去年秋から5ヶ月間で章ごとに期間をあげ撮影。俳優主導の映画づくりを目指し、撮影照明録音以外は全て俳優が兼任しました。カメラはPanasonic GH4を使用。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

リラックスして楽しめるのがクリエイティビティを発揮できる空間だと思っているので、明らかに余裕を持って物事を進められるように心がけています。コロナ禍で難しいことは多々ありますが、関係者全員がのびのびと意見を出し合えるような現場づくりをしたいと思っています。あと美味しいものを皆で食べること。

監督：加藤紗希

かとう・さき◎1989年生まれ、愛知県出身。18年、映画美学学校のアクターズコースを修了。『泥濘む』でPFFアワード2019に入選。振付師・俳優として活動する傍ら、豊島晴香との創作ユニット「点と」を立ち上げ、映像作品の制作を行っている。



『みなみとあした』

2021年/カラー/22分

監督・脚本・編集：林崎征大

撮影・照明・録音：井口暁人/撮影・照明：霧生笙悟/録音：鈴木理利子/撮影：蔡 融霖

出演：鈴木理利子、廣田直己、丸岡未歩、林崎征大

かつてあった時間に、ありえたかもしれない優しい物語

先輩の家で恋愛相談をしている大学生みなみを中心に、男女4人の恋や友情が交差する一夜。震災前日というかつて私たちの経験した時間を誰かの日常として生々しく誠実に描いた本作は、観客自身の記憶を刺激する。

🕒 9.14 ⑧ 14:30~小ホール
9.19 ⑧ 14:30~

program

C

ココが
すてい!

登場人物が執拗に見つめる日時がある。

2021年にいる観客にとってそのあとの出来事は自明だから、カウントダウン的にこの映画を経験しようかと身構える。

でも、みなみがコートを抱きしめているとき、青木のルービックキューブが完成するのを見るとき、そういったなんでもない個々の時間の塊がくっきり浮かび、その後の時間に呑みこまれるのに抵抗しだす。この映画が描くのは、それぞれの「いま」と「あした」が交差する進行形の過去。未来を夢見ながらその瞬間を生きていたどこかのだれかを、映画はたしかに想像/創造できる。

新谷和輝 ラテンアメリカ映画研究者

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

誰かを好きになるという事は、その人の人生そのものを自分に向けさせたいと願う事とも言え換えられると思います。言葉にしてみるととても恐ろしく思える行為を、色んな人が疑いもなく繰り返してきた結果が今なのかもしれない、というようなことを考えたのがきっかけです。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

企画、脚本：1ヶ月。撮影：5日。編集：2週間。スタッフ：4人ほど。カメラ：Panasonic GH5S

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

人と人とのコミュニケーションを撮ることを大切にしています。俳優同士の、互いの仕草やふとした動きに対するリアクションを演出する事、自然に体が動くようなシチュエーションや現場をつくることを考えるようにしています。

監督：林崎征大

はやしざき・まさひろ◎1998年生まれ、東京都出身。昨年、在学する武蔵野美術大学の課題で10分間のドラマを制作し、多くの人と関わり合う映画制作に改めて魅力を見出す。4年生である現在、卒業制作として実写映画の制作を進めている。



『夜の帳につつまれて』

2021年/カラー/70分

監督・脚本・撮影・編集：松林悠依

録音・照明：榎原 凜/録音・照明：片山名緒子/録音・照明：松本大河/助監督・美術・衣装・メイク：遠藤はいさ

出演：林原 翔、川合結人、野村 考、千代反田美香、秋山大地

不幸な生い立ちを乗り越えた先の、他者との共生を描く

仕事をクビになった裕也は、育児放棄されていた小学生・海斗を連れて旅に出る。親切々な人々との出会いや母親との再会を通し、裕也は自分自身を見つめ直す。人と共に生きることの温かさや苦しさを力強く描いた作品。

🕒 9.15 ⑧ 13:30~小ホール
9.18 ⑧ 15:00~

program

D

ココが
すてい!

育児放棄された少年、細々と暮らす老夫婦、家を飛び出した息子を案じる母、抑圧的な父と暮らす家を出たいと願う娘。

本作の登場人物は誰もが「弱い」人間だ。しかし、少年を「助けてやりたい」と思ったのは、自身も肉親の愛情を感じずに育った青年で、少年と青年を助けるのは弱いはずの彼らだ。困っている人を助け、悪いと思ったら素直に謝る。生きることは、他人同士が助け合うこと。彼らはそんな「当たり前」を体現している。当たり前が壊れた現実で、本作は新たな世界の萌芽を映す。この出会いに、快哉を叫ばずにはられない。

木村奈緒 フリーライター

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

前に進みたくてこの作品を撮りました。8年前に出会った男と学童でアルバイトをしていた時に出会った小学生の男の子のこと。年齢は違うけれど、彼らは生まれ育った環境の中で、彼等自身の心と必死に戦いながら生きていくように感じました。そんな彼らと、過去の私にそっと寄り添いながら、一緒に映画づくりの旅にできました。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

制作期間は、脚本から編集までで4ヶ月、6人の制作メンバーで、この作品を撮りました。使用カメラはCanonのX8iで子供の行事撮影用として使っていた叔母のカメラを借りました。

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

撮影現場の雰囲気です。留学時、友達の自主映画制作の手伝いで参加した現場の雰囲気があまり良くなく、居づらい気持ちになってしまいました。そうした経験から、一人一人の意見や気持ちを聞きながら、そこから生まれる全体の雰囲気を現場では大事にしようと思いました。

監督：松林悠依

まつばやし・ゆうい◎1997年生まれ、三重県出身。アメリカ留学中、講義や校内ミニシアターを通じて、様々なジャンルの映画に触れ、衝撃を受ける。現在は早稲田大学で、映像制作の授業を履修し、映画制作の基礎知識を学んでいる。



『ROUTINE』

2021年/カラー/21分

監督・脚本・編集：宮原拓也

撮影：Ame/録音：宮原淳志/整音：松隈結花/助監督：河野桃子

出演：ハチロウ、うをとも、田丸大輔、石川貴一、佐々木七海

🕒 9.12 @ 17:45~
9.16 🎟 13:00~ 小ホール

ジャグリングのリズムが心地よい、個性的なバディ映画

足の悪い清掃員ミトの職場に現れた青年。無言でジャグリングばかりしている不思議な男だが、その才能を清掃作業にも活かせる事に気づく。日々の労働=ROUTINEの中にも、新しいリズムが生まれていく面白さ！

program

A



オープニングから目にも耳にも楽しく、ショーが始まったワクワク感を感じました！

主演のジャグリング技術もさることながら、人付き合いが上手くない登場人物達それぞれが持つなんとも言えない愛嬌には惹かれるものがあります。ジャグリングと音楽でコミカルさと気持ちよさを感じさせつつ進んでいくストーリーは、音楽活動もしている監督だからこそそのリズム感とテンポ感の良さで、他の作品では味わえないものがありました。

稲垣美音 デザイナー

監督：宮原拓也

みやはら・たくや◎1992年生まれ、東京都出身。もともとインディーズバンドのドラマーとして音楽活動に没頭。やがて映像に触れる機会が増えたことで、徐々に映画に魅せられ、現在は仲間たちと自主制作を続けている。

この作品を撮ろうとしたきっかけを教えてください。

- ①高校時代の親友がジャグラーで、いつかジャグリングをモチーフにして映画を撮りたかった。
- ②小さい頃からビジュアルコメディが好きで、令和でバスターキートンみたいなことをしてみたかった。

制作期間や撮影体制、使用カメラについて教えてください。

使用カメラ：Blackmagic Pocket Cinema Camera 4K。撮影期間：3日。制作体制：身内を集めてキャスト含めて10人程度

映画づくりで一番大切にしていることは何ですか？

言葉にたよらないストーリーをつかってみたいなといつも思っています。

